

興福寺鐘楼・東金堂院の発掘調査

法相宗大本山 興福寺

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部

調査地：奈良市登大路町

調査期間：2020 年 7 月 1 日～（継続中）

調査面積：514 m²（鐘楼地区：345 m²、東金堂院地区：北区 136 m²・南区 33 m²）

鐘楼地区の現地見学会を開催します

2020 年 9 月 28 日（月）11:00～15:00 ※小雨決行

新型コロナウイルス感染症対策のため、定時説明はおこなわず回遊型としますが、随時研究員が説明します。

概要

- 興福寺鐘楼の創建当初の建物規模や構造を確認し、再建の際にはその位置や規模を踏襲しながら、繰り返し基壇の改修をおこなっていることがわかりました。
- 東金堂院の西面回廊では、五重塔の正面に開く門の規模と構造を確認し、再建あるいは改修時の状況がわかりました。

1. 調査の経緯と目的

興福寺は、藤原不比等が奈良時代はじめ（8 世紀前半）に、平城京左京三条七坊の地に建立した藤原氏の氏寺です。奈良時代から中世を通じて中金堂院を中心とする大伽藍を誇りましたが、たび重なる火災に遭い、再建が繰り返されてきました。

現在、興福寺では「興福寺境内整備構想」（1998 年）に基づき、寺観の復元・整備を進めています。これにともない、奈良文化財研究所では 1998 年以来、中金堂院や南大門などの発掘調査を継続しておこなっており、今回の調査もその一環です（図 1）。調査は 2020 年 7 月 1 日より開始し、現在も継続中です。鐘楼地区については、規模と構造を確認するためにその基壇全体を調査しています。東金堂と五重塔を中心とする区画である東金堂院地区については、五重塔の正面に開く門とそれに接続する回廊の構造（北区）、またその南面を画する築地塀の構造（南区）をあきらかにすることが大きな目的です。調査面積は計 514 m²で、うち鐘楼地区では 79 m²（2015 年度、奈良文化財研究所）が、東金堂院地区では 27 m²（1974 年度、興福寺）が既調査区と重複しています。

2. 興福寺鐘楼と東金堂院の概要

興福寺では中金堂の北に講堂があり、これらの東には経典を収蔵する建物である経蔵、西には梵鐘をつり下げて鳴らし僧侶に時を告げる鐘楼が建てられていました。これらの建物の東・北・西をコの字型に取り囲む三面僧房で、僧侶が起居していました。

鐘楼の創建年代はあきらかではありませんが、『興福寺流記』に引用されている「宝字記」に鐘楼に関する記述があることから、天平宝字年間（757～765）には完成していたことが知られます。一方、『興福寺流記』の別の箇所では、鐘楼ほかの建物について「本願之御時、所造立也。」と記しています。これによるならば、鐘楼は「本願」＝藤原不比等が死去した養老4年（720）以前、あるいは遅くともそれからあまり降らない時期に建造されたこととなります。建立以後8度ほど火災に遭い（表1）、最後の焼失は享保2年（1717）のことで、それ以降は再建されることなく現在に至っています。調査前、鐘楼は基壇状の高まりを残しており、地表に礎石の上面が露出していました。2015年度の調査ではこの高まりの西北隅と東南隅を部分的に発掘調査し、基壇の一部を確認しています。

東金堂院は中金堂院の東に位置します。単廊と築地塀で四周を取り囲むとみられ、北面と西面が礎石建ちの単廊、東面と南面が築地塀と考えられています。『興福寺流記』によると東金堂は神亀3年（726）、五重塔は天平2年（730）の創建で、東金堂院回廊も同じ頃に建立されたとみられます。建立以後、東金堂と五重塔は何度も火災に遭い、現存の建物は応永年間（1394～1428）の1420年前後に相ついで再建されたものです。回廊は現存しておらず、いつ廃絶したかなど詳しい沿革はあきらかではありません。なお、北面回廊にはいくつか礎石が露出していますが、回廊の大部分は平坦になっており、現状では西面回廊については地上に礎石や基壇の高まりは認められません。防災工事にもなう発掘調査（1974・2014年度）では、北面回廊で礎石と基壇を確認し、西面回廊では五重塔の正面で部分的に門の基壇を検出しています。

3. 主な検出遺構

（1）鐘楼地区（図2）

礎石と柱配置 鐘楼では9基の礎石が残存しており、長径1.0～1.9mで、柱座などの造り出しはありません。これらの礎石は、多くが創建当初の位置を保っているとみられます。礎石位置からみて、鐘楼は桁行3間（約10.1m、34尺）×梁行2間（約6.5m、22尺）の規模です。柱間寸法は、桁行では中央間が12尺、両脇間が11尺、梁行は11尺等間であったと考えられます。

基壇 基壇は良好な状態で残存していました。現存する基壇の規模は、南北約15m、東西約11mで、基壇の出は各面とも2.2mです。基壇は、礫層の地山のうえに種類の異なる土を積んで構築していますが、版築はおこなわれていません。基壇外装については、たび重なる焼失をうけ平安時代、室町時代に据え直されたとみられる羽目石の一部を確認しました。享保2年の焼失後も抜き取られずに残置されたものとみられます。基壇周囲の雨落溝は認められません。このほか、基壇周囲には創建時に施されたとみられる小礫敷を部分的に検出しました。

基壇については、室町時代以降に一度、土を積み足して整備しなおしていることがわ

かりました。複数回に及ぶ焼失を示す炭層や焼土とその度の整地によって基壇が埋没したためと考えられます。さらに、積み足し前の基壇上面において、四周をめぐる素掘溝を検出しました。総長は南北 13.4m、東西 10.1m です。鐘楼の下層部分は袴腰はかまごしと呼ばれる構造物で覆われていたことが絵図等からわかります。この素掘溝は袴腰の基礎を抜き取った痕跡と考えられます。

『興福寺流記』には、鐘楼の規模について大小二つの記載があります。一つは経蔵（＝桁行 34 尺、梁行 22 尺）と同規模とする記述で、鐘楼の礎石位置から推定される柱配置に基づく建物規模と一致します。一方、「弘仁記」（弘仁年間〔810～824〕）には桁行 46 尺（13.6m）、梁行 35.3 尺（10.4m）とあり、また「宝字記」（天平宝字年間〔757～765〕）も同様である、とも記しています。経蔵の規模より一回り大きな「弘仁記」および「宝字記」の記述が何に基づくものかは判然とせず、課題とされてきました。今回検出した基壇上面をめぐる素掘溝の南北および東西距離は、「弘仁記」および「宝字記」の数値とほぼ一致しています。これにより、「弘仁記」および「宝字記」は、袴腰下端の平面規模を記していると解釈できるようになりました。袴腰をもつ鐘楼は、これまで平安時代後期以降のものが知られていましたが、今回の調査の結果、奈良時代の創建期にまで遡る可能性があります。

階段 基壇の西面では、2 時期の階段跡の可能性のある痕跡を確認しました。幅（南北）は約 1.6m、階段の出（東西）は約 1.2m とみられます。また、基壇の東面にも割石を用いた一段以上の階段を検出しました。幅（南北）1.5m 以上、階段の出（東西）は 0.6m 以上です。創建期の階段は西側に位置する僧房（西室）に向けて設置されましたが、この階段は東側を向いており、僧房廃絶後に設けられたと考えられます。

瓦溜 基壇の南西では幅約 1m、長さ約 7m の範囲に帯状に広がる瓦の堆積を検出しました。中世の焼失に伴う落下瓦の可能性もあります。また、基壇の南では創建時の整地層を浅く掘り込んで瓦を捨てた瓦溜があり、平安時代の土師器皿を含むことから、平安時代の焼失に対応する片付けが行われたことを示します。

東西溝 鐘楼の北を東西に走る石組溝を検出しました。側石・底石に長径 10～50cm の玉石を用いています。幅約 50cm、深さ約 10cm で、2015 年度の調査での検出分と合わせて長さ約 15m 分を検出し、さらに調査区外に延びます。経蔵の北でも、ほぼ対称位置で同様の石組溝が見つかっています。これらは創建期に遡り、講堂周辺の排水溝としての機能をもっていたと考えられます。

玉石敷 東西溝の北で東西方向の玉石敷を検出しました。長径 10～20cm 程度の玉石を敷き詰めており、南側に見切りの石をならべています。幅は 80cm 以上です。経蔵の北でも、ほぼ対称位置で玉石敷を検出しています。主要堂塔を結ぶ通路と考えられます。

（2）東金堂院地区（図 3）

門の規模と構造 北区中央で礎石抜取穴を 7 基検出しました。大きさは一辺 80cm 程度で、一部は据付掘方の可能性もあります。門の規模は、桁行 3 間（約 8.6m、29 尺）×梁行 2 間（約 4.7m、16 尺）となり、切妻造の八脚門であったと考えられます。柱間寸法は、梁行が 8 尺等間で、桁行は中央間が 11 尺、両脇間は 9 尺とみられます。

門の基壇外装と雨落溝 基壇外装については、門の東側で地覆石じふくいしとその掘方・抜取溝を検

出しました。おもに凝灰岩の切石を用いています。門の柱位置から門の中軸が判明したので、それを基準に対称に復元すれば、基壇の規模は南北約 10.6m、東西約 7.7m と推定されます。なお、掘方の埋土に炭を含み、凝灰岩の大きさが不揃いなので、改修後あるいは再建後の姿と考えられます。地覆石の東側にもう一列の凝灰岩の石列があり、その間が雨落溝となります。雨落溝の幅は約 75cm です。

西面回廊の基壇外装と雨落溝 回廊の基壇外装についても東側で地覆石とその掘方・抜取溝を検出しました。凝灰岩の切石を用いており、門の中軸で対称に復元すると基壇の幅は約 6.2m と推測されます。また、地覆石の掘方には炭が含まれていることから、罹災後の改修・再建にともなうものと考えられます。また、改修・再建にあたっては、埴や花崗岩なども用いています。門と同じく、東側にはもうひとつ石列があり、その間が雨落溝となります。調査区北端では雨落溝に瓦が堆積している状況を検出し、回廊廃絶時の姿がわかります。

石 敷 北区中央の東端で検出した石敷です。西端には凝灰岩切石を転用して配置し、その東側に直径 10cm 程度の石を敷き詰めています。五重塔の正面に位置しており、五重塔への参道と思われます。

礫 敷 北区西北部で検出した礫敷で、直径 3cm 程度の礫を敷き詰めています。南西から北東へ延び、一部、西面回廊の基壇を切り通すように敷設されています。『大和名所図会』（寛政 3 年（1791））に描かれた東金堂へいたる参道と考えられます。

南面築地塀 南区の南端で、東西方向に延びる土壇状の高まりを検出しました。この高まりは、既往の研究でこの位置に想定されている寺域を画するための築地塀と考えられます。基壇上には約 3m 間隔で東西に礎石 2 基が配されており、築地塀にひらく穴門の可能性がありそうです。なお、この礎石付近には、凝灰岩の切石が据えられています。

東西溝 南区で検出した、幅約 75cm の素掘溝です。東金堂院内の雨水を西へと排水するための、鎌倉時代の排水路と考えられます。

4. 主な出土遺物

土 器 奈良時代から明治時代にかけての各時代の土器・陶磁器が出土しました。鐘楼地区では、中世の土師器皿と明治時代の陶器が目立ち、東金堂院地区では平安時代から鎌倉時代の土師器皿が出土しています。

瓦埴類 奈良時代から近代までの瓦が多く出土しました。奈良時代のものは少なく、軒瓦も含め中世につくられたものが比較的多く認められます。東金堂院地区では緑釉埴の破片が出土しました。

5. まとめ

①鐘樓の創建時及び再建時の建物規模と構造が判明した。

鐘楼については基壇が良好な状態で残存しており、創建当初の建物規模と構造を確認できました。柱位置や柱間寸法については経蔵と同じく桁行 3 間（約 10.1m、34 尺）×梁行 2 間（約 6.5m、22 尺）であり、これまでの中金堂や南大門の調査成果と同じく、たび重なる再建の際にもその規模を踏襲していることがわかりました。また、袴腰をもつ建物で

あった可能性が高いことが発掘遺構から判明しました。『興福寺流記』が伝える鐘樓の建物規模に関する二つの記載は、柱位置で測ったものと、この袴腰を含めて測ったものを意味している可能性が高まりました。袴腰をもつ鐘樓は、これまで平安時代後期以降のものが知られていましたが、今回の調査の結果、奈良時代の創建期にまで遡る可能性があります。

②鐘樓の再建工事の様相が判明した。

たび重なる焼失を受けて、少なくとも平安時代・室町時代に基壇外装の改修をおこなっている様子を確認しました。また、室町時代の再建に際しては、それまでの焼失と再建で基壇周囲に繰り返し整地をおこなったために低くなった基壇高を補うため、新たに基壇土を積み足して補修するなど、大幅な改修工事をおこなっていることがわかりました。

③五重塔正面の門の規模と構造が判明した。

五重塔正面の門は、桁行3間（約8.6m、29尺）×梁行2間（約4.7m、16尺）の切妻造の八脚門となることがわかりました。基壇の規模は、南北約10.6m、東西約7.7mと推定されます。門の中軸線（東西方向）と五重塔の中軸線とがほぼ一致するので、造営当初の計画的な配置を踏襲していることがうかがえます。

【本件連絡先】

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所都城発掘調査部
(平城地区)

表 1 興福寺鐘楼罹災年表

No.	和暦	原因	再建	出典
1	元慶 2 年 (878)	失火	元慶 5 年 (881) 以降	『日本三代実録』
2	永承元年 (1046)	西里の民家への放火からの類焼	永承 3 年 (1048)	『興福寺流記』 『扶桑略記』 『造興福寺記』 ほか
3	康平 3 年 (1060)	中金堂からの出火	治暦 3 年 (1067)	『康平記』 『扶桑略記』 『三会定一記』 ほか
4	永長元年 (1096)	中室からの出火	康和 5 年 (1103)	『中右記』 『後二条師通記』 『三会定一記』 ほか
5	治承 4 年 (1180)	平重衡の南都焼き討ち	養和元年 (1181)	『玉葉』 『山槐記』 ほか
6	建治 3 年 (1277)	僧房への落雷による火災	再建年不明	『三会定一記』 『興福寺略年代記』 ほか
7	嘉暦 2 年 (1327)	寺内の紛争に基づく放火	応永 5 年 (1398)	『法隆寺別当次第』 『嘉元記』 『大乘院日記目録』 ほか
8	享保 2 年 (1717)	講堂からの出火	その後、再建されず	『南都年代記』 『塩尻』 ほか

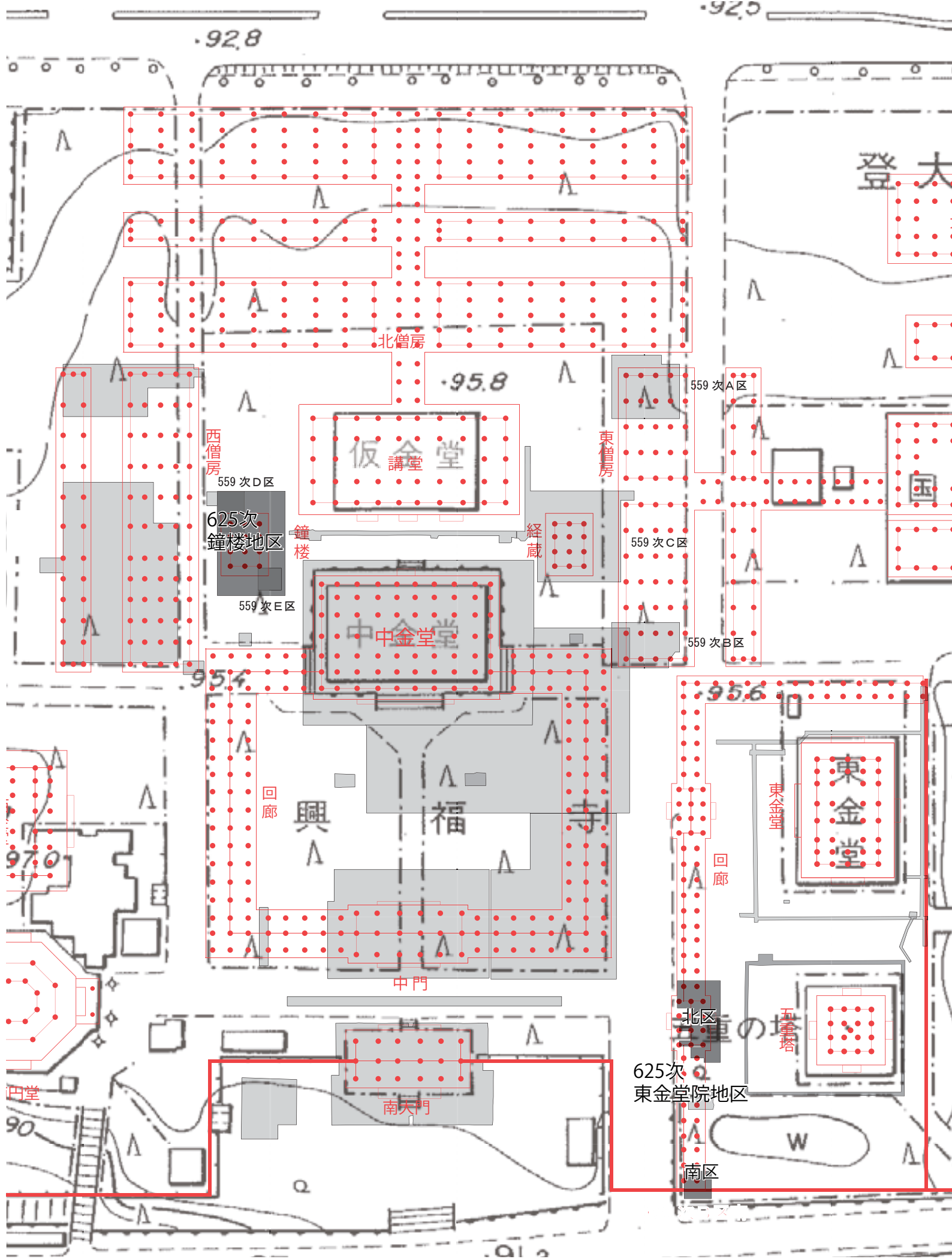


図1 今回の調査区位置図



図2 鐘楼地区遺構平面図(S=1/100)

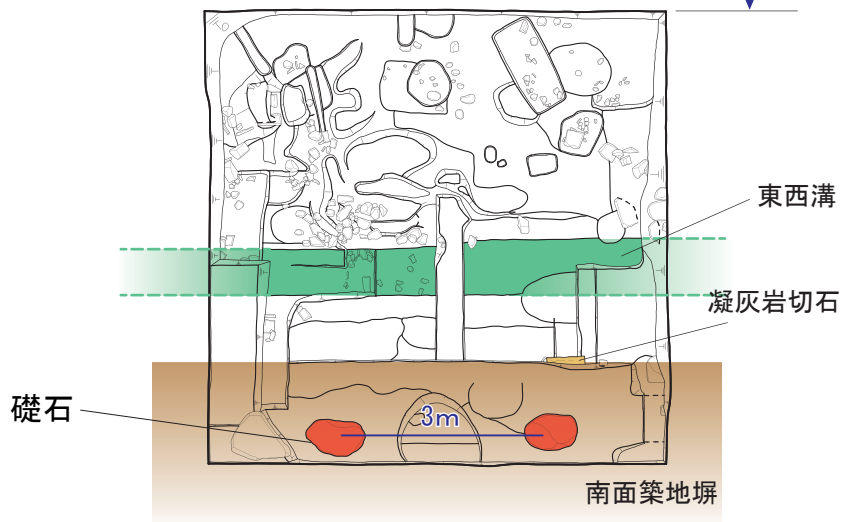
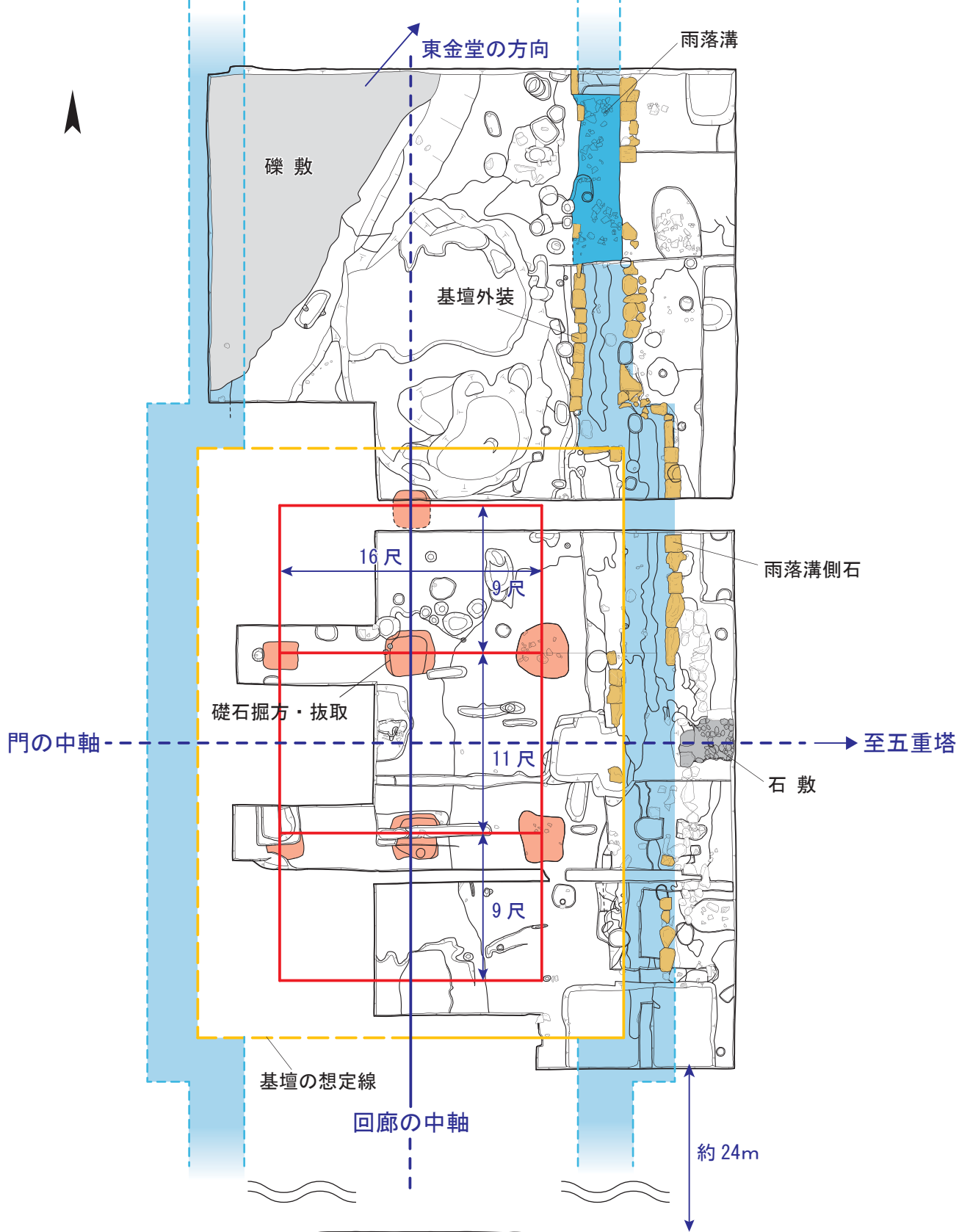


図3 東金堂院地区
 遺構平面図 (S=1/100)